

## 「フクシマから新年のおもい」

辺 見 美津男

二十数年手をかけ、様々な生き物が育んでいたビオトープの庭が昨年の除染作業で地表面のあらゆる生命が剥ぎ取られてしまった。それでも、いつもの早春の花の香を乞うように和蜂（日本ミツバチ）の巣箱の羽音が雪に覆われた除染の閑地に空しく響く。思わず手をあわせ「春をふたたび」と祈る。

春を乞い 和蜂の羽音 残雪に 空しく響く 除染の閑地

残雪に 香りを探す 和蜂音に くる春祈る 除染の閑地

我々はとりわけ自然環境にあまりに無謀でさらには無力であることに気付かない無責任な対応を繰り返してきた。

このことは、さらなる「豊かさ」を追い求めて、これからも続いていく。これは誰にも止めようがない「人間の性」。

一方で人間にかかわらず地球上のすべての生命はその命の継承を宇宙の力で義務付けられている。

その生命は同種異種を問わず食物連鎖に代表する様々な形で自分以外の生命体を利用し生存する。しかるに人間の都合だけで自然のバランスを無謀に破壊することは人間の生命継承をも脅かす。

ここに記したことは今さら申すまでもなく先人達が久しく指摘してきしてきたことである。しかし「経済社会」がこの指摘を積極的に受け入れてこなかったことは周知の事実であろう。今なお続く原発災禍はそのことを如実にしめている。

ここで誤解のなきよう付記するが、子育てを終えた還暦の自身も「経済社会」に依存するひとりである。「人間の性」から逃れることもかなわない。それ故に今なお続く原発災禍に対する自責の念を禁じ得ない。

還暦は一周を終えるけじめと新たな一步を踏み出す覚悟の年、馬力をひかえて、しっかりとした一年にしたい。

「無謀から深謀」「無力の自覚」「絶対的責務」どれも言葉では易いが実践する「ものの見方、考え方」では複雑で難解を極める。しかし要は場面ごとで一度立ち止まり思索すること。

それは建築の解のようにすべての事象にベストアンサーは存在しないからである。

いま東北は国の借金、少子高齢、人口減少等々の諸問題の孕みのなかで復興

を成していかなねばならない。この現状の「時」に我々がどのように向き合っていくか。

ここで「ハチドリの一とすく（いま、わたしたちにできること）」辻信一著の本を引用する。ジャングルの大火事でほとんどの動物たちがなすすべもなく諦めて逃げ出しているなかで「クリキンディ」という一羽のハチドリが嘴に水を蓄えて一滴一滴燃え盛るジャングルに運ぶという南米アンデス地方の先住民族に伝わる話である。



この話は「すべきこと」「できること」が「無力の自覚」によって発揮されることがあるということを示唆しているように私的に考察する。

ジャングルの大火事のような現状の「時」に遭遇した我々は、まさにたいしたことはできない無力を自覚し「すべきこと」「できること」を思索したい。

我々の「一とすく」は特に日々の職能奉仕のなかにこそ存在してきたはずである。しかし私はこれほどまでに大火事が広がるまえに「一とすく」を運んでいなかったことへの自責の念を「原発災禍」から抱くこととなった。

だから「復興」という認識をあの日（3.11）からではなく、そのはるか以前からとして捉えたい。

特に「物事」よりもむしろ「心」の側に重きを感じる。「心」の問題が前述の「人間の性」に起因するなら我々の職能の「一とすく」が「人間の性」に向き合いながらも特に「生命継承」に対して思索したいものである。



除染前の写真



除染後の写真